

## 5歳児の仲間関係 ～他者を思いやる心の育ち

最終回



共立女子大学  
河原紀子

かわはら のりこ／早稲田大学人間科学部助手を経て、現在、共立女子大学家政学部教授。著書に『0歳～6歳子どもの発達と保育の本』（監修・共著、学研プラス）、『子どもと食：食育を超える』（共著、東京大学出版会）など。



前回は、4歳児の仲間関係の特徴について述べました。4歳児は友だちのアドバイスをききかけに、一方が他方に譲ることによって対立する要求を解決しはじめること、さらには、グループ活動や特定の親密な友だちとの関係において葛藤し、折り合いをつける姿が見られることが特徴でした。

### ●みんなのなかで自分の役割について考える

前回は紹介したグループ活動には、係や当番など園によってもさまざまなくみがあります。5歳児クラスになると、その役割や内容、範囲も広がり、いつ、だれが、どこで、なにをするのか、それはなんのためか、といったことをより明確に意識しておこなうようになります。

ある園の朝の会活動の様子です。当番の班が朝の会を進めていきます。

#### 【事例1】当番活動での係決め

朝の会活動では、まず全員が輪になって集まり、そのなかで、当番の班員が3つの係（給食、お名前呼び、カード）のどれを担当するかを相談して決めます。そして、「名前呼び」の人が出欠を確認し、人数が確定したら、それぞれ「給食」は給食室へ人数を報告に、「カード」は人数などを書いて事務所に

持っていくという仕事をします。

みんなの輪の真ん中で「相談しよう、そろそろええ言ったあと、それぞれ「お名前呼びしたいです」「カード行きたい」などと希望を言いました。ところが、この日は班員が3人しかいないのに、Y子も、S男も「名前呼び」を希望しました。K太は、「カード」と言ったので、「給食」を担当する子どもがいません。そこで、朝の会がストップしてしまいます。周囲の子どもたちからは「お名前呼び、一人が我慢したらいいやん」や「給食、食べられないよ」といった声がかかります。しばらく先へ進めずにいると、担任の先生が「どこまでいったんですか？」と尋ねます。するとY子は最初「相談」と答えたのですが、何を思ったのか、その後首を振って「決まった」と言いました。

そして、Y子が「私はカード行きます」続いてK太が「僕は給食行きます」と言ったのです。S男は当初の希望通り名前呼びということで、当番の係が決まったのでした。

事例1の補足として、いつもなら5人で3つの係を担当するのですが、この日は2人が体調不良で当番活動に参加できないという事情がありました。

そんななか、Y子は全体のなかでの役割を考え、友だちの意見もふまえ、自分の希望を変えたのです。

あえて言えば、Y子が「給食」に変更するパターンが最も単純だったとは思いますが、Y子は少し勘がいたようで、それでも、

K太が気を利かせてカードから「給食」に変更したので、この日の朝の会を無事に進めることができたのでしょう。

### ●第三の選択肢を提示する

子ども同士の要求や意図が対立した場合、条件を付けたり、交渉したりしつつ、一方が他方に譲ることが解決策のひとつになります。しかしそれだけでなく、5歳児はどちらの要求をも考慮した提案ができるようになります。

#### 【事例2】ごごの敷き方をめぐると話し合い

ホールで午睡用の布団の下に、ロール状のごごを伸ばしながら敷く場面です。T太は、初め一人でごごを準備し、そこへI男が来て二人でごごを敷いたのですが、T太は本当は一人でごご敷きをしたかったようです。T太がI男にそれを伝えると、I男は「二人でやってもいいんだよ」とT太とそばにいたS吉に言います。S吉は「みんな二人でやっても、なんにも言わなかったよ」と言う。

そこへ保育者がきて「T太はひとりやりたかったの？」と聞くと、T太はうなずきました。そこで保育者は「一人でやりたかったと言うけど、どう？ 一人ずつ（ごご敷きを）やったらみんなができる？ 何個あるかな？」と尋ねます。S吉がごごを数えて、「9個あるからさ、（年長は）20人だから、二人でやったらいいと思う」と答えました。「T太はどう？ ちがう気持ち？」と保育者が聞くと、T太は首を振ります。「それでもいい

かなと思う？」と保育者が聞くと、T太はうなずきますが、悲しそうな表情をしています。保育者が「T太、悲しい顔してるよ、なんだろう？ 二人でやらないと（ごごの）数足りないのT太わかったって、でも悲しそうだよ」「どうしたら悲しくならなかったと思う？」などと聞くと、なんとS吉が「T太が途中でやって、いいよって言ったなら、ここまで決めてればさ、けんかとかしない」と言ったのです。「なるほど、いい考えだね」と保育者が言い、I男も「半分I男やって、T太がやる」と言います。S吉がその案でやれば、けんかしないでできるよ、とT太に言うのとT太はうなずきました。「そしたら、できそう？」と保育者がT太に聞くとT太は晴れやかな表情で大きくうなずきました。

事例2では、ごごを「一人で敷きたい」T太と「二人で敷いてよい（みんなが敷ける）」というI男（とそれに同意するS吉）というように最初は、両者の意見が対立していましたが、そして、一人で敷きたいというT太の思いを実現できるかを検討したところ、残念なことに、ごごの数と年長児の人数では二人で敷くとちょうどよいということになってしまいました。しかし、保育者はそこで終わりにせず、T太の悲しい表情からなにか良い案がないか尋ねるところが重要なポイントです。それによって、当事者ではない第三者のS吉が、T太のねがいである一人で敷くこととみんなが敷けることのいずれも可能にする第三の選択肢を提案することになったのです。